

私の保育

斎藤美和



『私の保育』という文章を書くことをお引き受けしたものの、もう何日も書けないで机の前をうろろしている。一年前、子ども生の姿が知りたいと、二年勤めたいわゆる一斉的な保育をする園を離れ今の園に来た私。その間のここで私と子どもたちとの生活。その中の子どもたちの姿が、声が、切れ切れに私の心の中に浮んでくるだけでなかなか文章にならないのである。

入園式の日、三六名のやんちゃな子どもたちと初めて顔を合わせた。Y史は見えなくなった母の姿を求めて大声で泣き叫んだ。J一はママの所に行きたいと心細く泣き私の手をギュッと握っ

た。A男は、はしゃいで窓に登ったり、いすの上に立ってみたり。次の日私は、登園する子どもたちを緊張して出迎えた。案の定Y史は母と別れるとすぐに泣き始め、J一も又泣いて私のそばを離れなかった。Iはあふれる涙をおさえて窓から母の姿を追った。I郎は私にくれる花束を手にバスを降りたものの心細くなったのか泣いて頑として部屋に入らなかった。A男は「先生こっちは来て」「先生一緒にあそぼう」と私に寄ってくる。泣いている子に追われてかまってやれないでいると「僕もう帰るよ」と言い出す始末。

あれやこれやと一年前の子どもたちのいろんな姿が言葉が今でも浮んできてうれしくなる。今では年長組になり、もう四か月が

たつ。この一年と四か月の間、私は毎日毎日の子どもたちの姿に支えられてまがりなりにも保育を続けることができたのだと思う。私は、子どもたちが楽しくあそんでくれる姿に感動しながら今まで過ごすことができたのだと思う。

「ねえ先生、今日ね私のたん生日なの。赤ちゃんが生まれるの。お祝いするからあとで来てね」スカートの下に何やら入れてお腹をふくらませたU子が私に楽しそうに話してくれた。私はそのかっこうに思わずふき出してしまったが「まあそれではあとでしょうかいいます」と答えるとU子は満足そうにこちそう作りを始めた。N美とM男が赤ちゃんになって加わる。その様子をU郎がコーナーのすみっこでうらめしそうにながめていた。U郎も又赤ちゃんになりたいのだと私にそつと耳うちして教えてくれた。「U子ちゃん、ほら双子だっているでしょう」と言う。「だってもう双子だもん」とU子。「じゃ仕方ない三つ子でいいや」とU郎も入れてままごとを続けた。

何ともほほえましく楽しい光景である。子どもってままごとでお母さんになることも好きだけど赤ちゃんになって可愛いがられることも好きみたいだ。時には、猫や犬になって頭をなでられて喜んでいたりする。

「ねえ先生、王子様になって来て、お姫様をお嫁さんに下さい

って来るのよ」とK子が私に話に来た。「ええいいわよ。どうやって行けばいいの?」「あのね、今は生まれたばかりで赤ちゃんだからもう少ししたら来てね。二人いるからね。お金持ってこないとだめなの。百万円って書いて持って来て。姫を下さいって言うのよ」

お金でお嫁さんをもろうとは何とも現実的な発想ではあるけれど、でも何て楽しいんだろう。生まれたばかりの二人のお姫様は「あかちゃんにはやあらかいものをあげてください」と書いた紙をはったテーブルの横でスヤスヤ(?)と眠っていた。次から次へといろんなことを考えて楽しくあそんでくれる子どもたちの姿に感動し、うれしくなって一緒になってあそんでしまっている私である。この一年四か月の日々は、私までも子どもたちの考えた世界の中で笑ったり、怒ったり泣いたりした日々であったと思う。

この夏に二人の子どもが私の元を離れ新しい地に移っていった。TちゃんとKちゃん。

Tは入園した時から外であそぶのが大好きで、登園するとカバンはテラスに置いたままでブランコにかけ出した子である。入園して三日目だったか、雨のため大好きな外には行けなかった。

「Tちゃんお外行きたいの」指をしゃぶって泣きじゃくるTがいじらしくて私は思わず彼を抱き上げて、屋根から落ちる雨つぶに彼の手を触らせてあげたことがあった。次の日からは晴れると毎日、ブランコや砂場でたった一人であそぶ彼だった。時折、「Oちゃんがブランコ取ったの」「くつがぬれちゃった」と泣いて私の所に戻ってくる以外はずっと。

一か月位たつと彼のあそびはもっぱら部屋の中に移る。ままごとコナにいすを持って行き、そこで一人でいつまでもごちそうを作っていた。フライパン片手に踊りながらごちそうを作る様は今思い出してもおかしくてふき出してしまふ。小さな空箱をいくつもカバンに詰めて園にやってくる日もあった。自分の箱は自分でだけで使い、なくなると他の人が持ってきた箱もかかえて何かを作る。A男が「これ僕が持ってきたんだよ」と気軽に声をかけても取り返されると思つてなぐったりつかみかかったりした。何かわからないが箱を長くつなげたものをうちに持って帰りたいと袋をさがすが見付からず、短気になってそばにいたA人につかみかかったことがある。私ははじめ何故おこったり泣いたりするのかわからなかったが、袋をさがしてあげると、もうそれはよるこんでここに。万事がその調子で彼の生活は彼だけのもので彼以外の人が入るすき間もないし、自分の要求は何が何でも実現し

たいし、それがかなわないとそばにいる誰にでもくつてかかってそれはもう大変だった。

車が大好きで「パトカーほしいな」「タクシーのハンドルほしいな」と彼が言うたびに私はない知恵をしぼってせせと作ってあげた。彼はそのハンドルを握ってもう運転手になったつもりで大満足。時には私が忙しく彼の要求をすぐには聞いてあげられなくて「待っててね」と頼むと、テラスに飛び立してそこにすわり込んで「だつてだつて」と泣きじゃくる。あんまり泣くものだから、まわりの子が「先生可愛いそうだから作ってあげれば」と言ってくれたりする。

彼だけの世界をつくって彼だけの世界に入っているようで、でも彼の心は友だちの所にも開いていた。九月のある日、彼はM男と共にままごとをする女兒の中に入っていた。K史がふざけてままごとのうちに入るとどろぼうだとおどけたかっこうで追いかけていた。部屋の中で一生けん命何かを作っているも、外ですみれ組のお友だちがリレーごっこを始めると「Tちゃんも運動会してこなくっちゃ」と外にかけ出していくこともあった。

年長のうめ組さんになると彼の作るものも少しずつむずかしくなつてきて私も一緒に頭をひねった。「Tちゃん、駐車場つくるの。ここがこうなつておちないようになっていっばいとまる

の「二階も三階もある駐車場は一日ではできないので、「つづき明日にしようね」と言う」と「だってTちゃんおうちであそぶんだもん」と途中のまま持って帰り、次の日の朝食をつくるんだとはりきって園にやってきた。「Tちゃんね、今度はデパートつくるの」次から次へと考え出しては私に助けを求めながら作っていく。もう以前のようにすぐに私が手を貸さなくても、他の子とあそんでいてもヒステリックにおこることも少なくなった。「あつ先生、たつちゃんにもパトカーつくって」私が他の子とあそんでいてなかなか作ってあげられないと「ああいよいよいいや。自分で作ろう」と自分で作り始めるようにもなった。

六月になって、彼が引越すことを知った私はビックリし、同時に心配になった。今まで彼の気持ちを大切にし、大事に大事に育ててきてしまった私は、彼が他の場でやっていけるだろうかと不安になったのである。でも彼は、荒波にもまれながらきつと一段とたくましく育っていくし、育ってもらいたいと願いながら、彼を見送ったのである。

Kは口数が少なく目立たない女児であった。私が他の子と砂場に行ったりブランコであそんだりしている後を、にこにこ黙ってついて来た。一緒にあそぼうと話しかけて誘っても首をふるだ

けで又あとからついてくる。一年前の記録には、今日も話ができない、気持ちがつかめないと毎日のように書いてある。

五月になってU K子があそぶのをじっと見ていることがあったので思い切ってU K子にKを誘ってくれるように頼んでみた。すゝると思いがけず喜んでU K子とあそび始めた。その後は、U K子とうれしそうにあそぶ姿をたびたび見ることはあったが、私とのつながりは相変らずできなくて、ある日ままごとでKがお母さんになってスカートをはこうとしている所を通りかかった時に「いわね」と思わず声をかけるとチラッと私の方を見てスカートをはくのをやめてしまった。

そんなKが九月になってIやA紀がなわとびをしているのを見て、「Kちゃんね、とべるんだよ」と小さな声でポツンと私に話してくれた時は、本当にうれしかった。私が外で他の子とはしごの汽車に乗って走っていると「先生ノ」と呼んだ。走っていて答えられないでいると「あつ気が付かないで行っちゃった」と笑っていたことがあった。日に日に明るくなって心を開いてくれたKを見るのがとてもうれしかった、それなのに、年が明けた一月には、又殻の中に入ってしまった、私の声かけを避けるようになった。そんなKの状態を察して、私は無理にKの心の中に入っていくことをやめた。するといつの間にかそばに来て、U紀がころん

だよとか、〇〇が呼んでいるよとか話しにきてくれたりする。

この頃のKは、U紀とあそぶかそうでない時はK里とずっと一緒だった。Kと私とのつき合いがほぼ一年になろうとしている時になって、Kは私からの働きかけに答えてくれた。その日、Kはあそぶ人がいなくなって一人でぶらぶらとしていた。いつも一緒のK里が他の人とあそぶのを見ている時には、Kの目は涙でいっぱいだった。「Kちゃん。K里ちゃんとあそびたいの。先生と一緒に言ってみようか」と声をかけるとうんとうなづいて、Kは私の手を握ってくれた。年長になってからのKは、とても明るく友だちの中にはいってあそぶようになっていた。そんなKが、今この園を離れていく、私のそばからいなくなる。最後の日、友だちにプレゼントの絵を描いてもらって、Kはまぶしそうに笑っていた。

昨年の夏のみどり会の津守先生のゼミで、私は、「保育者というのは、あそびをどうやって発展させるか、どのような教育的配慮をするのかと考えるよりも、ただの子守りでもいいのではないか」と発言したことがある。『ただの子守り』では、聞こえは悪くけれど、私は幼稚園という枠を取り払って、子どもたちが本当

に心を聞いてくれて安心して生活できる場所がほしいと思う。私は先生です。私はあなた方の先輩です。だから何かを教えます。というのではなく、ただ子どもたちが心を聞いて自分の生活をできるように手を貸してあげたいと思う。その意味で『ただの子守り』でもいいのではないかと発言したのだと思う。

こう考えた時、私の一年四か月の子どもたちとの生活を振り返ってみると、私だけの勝手きままでも何と子どもたちを引っ張りまわしたり、傷つけたりしたことが多かったろう。子どもは自分から心を開くことはしてくれなくても、こちらから無理やりに心の中に入れていくことは、拒む。当たり前のことなのに、Kの場合のように拒否されて初めてそのことに気付いた。気付かないうちにまだまだたくさんさんの過ちを犯しているのではないかと思うと、子どもたちにすまない気持ちでいっぱいになる。それにも増して、子どもたちが自分の世界に浸って無邪気にあそぶ姿のあることが何よりの救いである。

私の保育とは、一言では言い尽せず、かと言って、ダラダラと書いても結論が出るわけでもない。ただ、子どもたち一人一人の心持ちを大切に、その中で一緒に喜んだり、悲しんだり、怒ったりできる私でいいままでいいことだけである。

(埼玉・わかび幼稚園)